

五十七 園丁と蝶の対話 「認識と言語を巡って」その六

園丁 二回ほど現代哲学者の議論を話題にしましたが、たまたま僕の目にとまったものを採り上げたにすぎず、思索はまったく不十分だったでしょう。議論の対象は、力のない者がそれなりに認識について知ろうとする課題を超える部分を含んでいました。僕たちの議論からすると、元のように、カントの考えた確実な認識の範囲で対話を進めるのがよいと思います。

莊周 賛成です。現象学的還元論がカッコに入れた経験的世界をあくまで対象にして、君の言う唯物論的な認識論でどこまでいけるか考えていきましょう。

園丁 フッサールを解釈した竹田さんの文章に、「世界は、第一義的に、生きられ、経験されているものである」という言葉があります。この言葉に僕も共感します。二十世紀の現象学や実存主義やメルロ・ポンティなどの哲学的思考は、真剣に「人間の生」を考えようとし、そこには多くの学ぶべきことがあるのでしよう。しかし僕は、それらの哲学に全面的に従うことはできません。僕たちがそこまで戻ろうと決心したカントに、人間の生についての思慮が欠けていたとは思いません。

ニュートンの力学が提出されて、人間は、天と地を分けるそれまでの世界観を去らなければならぬことを知りました。力学をよく理解したカントは、天から地に降り立ちました。再び離陸しようとしたり心に潜り込んだりせず、地上で世界に向き合いながら生きることにしたのだと思います。カントが、「思惟の主観的条件が対象の一切の認識を可能にできるのかどうか、得られた認識がどうして客観的妥当性をもつと言えるのか」、どうして「人間の獲得した表象とその対象とが合致し、必然的に関係するのか」の問いを、感性や悟性などの概念を精製しながら考えたとき、その基礎には生物としての人間について深い洞察があった、と僕は思います。

荘周 うん。そのように考えるのは生産的でしょうね。

園丁 もう一つ、前々回の永井さんの「意識は実在しない」という議論を考えたととき、あなたに、人間の心というシンギュラーで不可思議なものを、数学の留数のような手品で理解できないかとかからかわれました。

荘周 あのとときは失敬しました。

園丁 数学をかじったことのない園丁ですから、毎日の作業をされていて考える生物的な議論を試みようと思います。それは、先ほどの人間の生ということに直結するでしょう。そこで今日は、生物としての人間という観点から認識を考えてみたいと思います。

莊周 それはよい接近法でしょう。まじめに聴きましょう。

F 生物が外界とかかわって生きることによって認識が生じること

園丁 現在、生物学はカントがニュートン力学の成立を見て認識論を組み立てたときと似た状況に達している、と僕は考えます。言いたいのは、現代生物学の知見の中でも揺るがないほど確実な事実に基づけば、人間の認識を科学的に踏み込んで考察することができるとは、とある程度です。そういう観点から、生物である人間がどのような程度の認識ができるのかを考えてみたいのです。

莊周 それほど簡単な仕事ではないですよ。現代人の常識以上のことができますか？。

園丁 わかりません。でも、それは認識の問題を考えるのに避けて通れない仕事だ、と思います。僕の手に残る問題だとしても、なんとか考えて、それなりの理解を試みなければいけないでしょう。

園丁 人間の認識を生物の能力として考察するとすれば、僕は、まず生物を自然科学の大枠の中に位置づけて始めるのがよいと考えます。思弁だけによって「祖先以前の實在」

を論証しようとする形而上学を断念するのです。生命以前と生命の誕生は再現して検証できない出来事ですが、現代科学は、宇宙史と生命史を相当の蓋然性をもって描いてくれます。惑星の運動をニュートンの運動方程式を解いて自分で確認することは何とかできて、現代物理学に対しては、同じことを僕たち普通人にはできません。しかしながら、同様の厳密な科学的方法で科学者たちが到達した宇宙史と生命史の大枠を信頼することができましょう。もし、万々一にもどこかに錯誤が見つければ、それを修正して認識を再スタートさせればよい、というのが科学的認識の態度だと思えます。現代哲学者の思弁だけで、ゲーデルの不完全性定理のようなものを見つけることはできないでしょう。自然科学においても同様だと考えます。ただ具体的な科学的認識の営みを続けることだけが、人間が自然に向き合う最も妥当な態度だと考えます。

莊周 君が今言った考え方を納得できない哲学者がいるかもしれませんよ。

園丁 はい。結局、哲学的立場の違いということになるでしょう。僕は、自分の立場で考えることにします。

ビッグバン理論が説く宇宙背景放射の測定に対してノーベル物理学賞が授けられました。もちろんノーベル賞が真理を保証するものではありませんが、ビッグバン以後の宇宙史の大枠が科学的認識として確実だとされたのです。ビッグバン以前のこととは不明で

すし、それ以後の宇宙史が確定的に明らかになつてゐるわけでもありません。ニュートン力学がアインシュタインの相対性理論によつて修正されたような事態が起こる可能性は排除できません。それでも、ビッグバンから宇宙の膨張が始まつて星々が形成され地球が形成されたという宇宙史の大枠は、確實で、覆されることはないでしょう。地球が宇宙で物質の集成によつて形成されたという理論は、カントが考えたことでもありません。それが確實だとすれば、形成された地球に現に生物がいますから、「生命が太古の地球で発生した」ことが肯定されます。生命以前になんらかの实在物がなければ生命が発生する条件もないのです。

生命発生は、原子の階層にある物質の存在様式上の画期的な跳躍です。『生命、エネルギー、進化』で生化学者N・レーンさんがしたように、生命発生は、物理学で知られている一定の条件下での非平衡散逸構造の発現と同類の出来事として起きた、と考えるのが有効だと思ひます。それは「蝶の雑記帳五十三」で考えました。このような種の相転移にこそ、創発という言葉がふさわしいでしょう。この問題は今の僕たちの直接の課題ではありませんが。

莊周 唯物論的立場に立てば、そういうことですね。そこからどうなるのですか？。

園丁 地球で生命が発生したことを肯定すれば、すべての生物は、親の世代から生命を継

承し、同質の遺伝物質DNAをもっていますから、現在観察される驚くほど多様な生物は最初の生命の子孫である、という推論が論理的に導かれます。このことを承認して話を進めたかったのです。

幾世代もの変異をとまなう遺伝によって生物が多様化したとする進化論は、家畜や栽培植物の「改良(人間の言う)」によって人間が実証してきたことですが、たくさんの科学的証拠があがってきました。現代では、遺伝を担うDNA分子の全配列が特定できて、すべての生物が遺伝的な関連をもつてつながっていることが明確になっています。原初の生命からの進化を完全に検証することはできませんが、長大な時間をかけて多様な進化が起きて人間はその一端にいる、という結論が得られます。

\*

園丁　そこで、人間の認識を考えるのに、そもそも生物がどうやって外界と関係を結ぶことができるのか、最初に原初段階にある単細胞生物を見てみるのが有益でしょう。

単細胞生物は、細胞壁の外から必要な(利用できるエネルギーも含有する)物質を採り入れて、代謝(生化学反応による細胞内物質への変換)を行ない、あとに残る(エン

トロピ一の増えた)物質を外に排出します。この細胞が同じ活動をする別の同型の細胞を生んで世代を重ねる機構を具えているとき、僕たちはそれを生命と呼びます。生命のこの宿命を背負って、すべての生物は外界の物質を食べなければ生きていけません。

腸内細菌は、腸にやってくる食べ物(細菌にとつての食べ物)を腸内にいて待っているのですが、大腸菌に鞭毛があるのはどうしてでしょうか。それを手段にして動き回り、食べ物に遭遇すれば細胞壁の中にその食べ物を採り込むためです。大腸菌は温かさも感知できるそうです!。この二つだけでも、食べ物にありつく機会を増やして生きていくのに有利でしょう。大腸菌は、摂食という活動のために、外界と関係を結ぶ体制と機能をもっていると言えます。

今いる単細胞生物のこの能力は進化によって獲得されたものでしょうが、生命発生の原初まで外挿して考えても、生命は、誕生以来、外界(環境)と関係を結ぶ者として存在する、と言えるのではないのでしょうか。莊周さん、これをお認めになりますか?。

莊周 そういふ言いは許されるでしょうか。しかし、自然界全体を見渡してある物質に注目すると、その物質はほかの物質と関係を結ぶものではありませんか?。今君の言ったことは生物だけに当てはまるのではないですね。

園丁 ええ、そうです。そもそも物理法則は、物質の中に光のような存在の仕方のモノも

含めて、「物質が時間と空間においてほかの物質とどのような関係を結ぶか」という数  
理で表現されるのです。けれども、生命活動をする物質とそうでない物質を区別するこ  
とができます。結晶や鍾乳洞の石筍は成長しますが、生命活動をしているのではありま  
せん。

莊周 分類はいつも境界線をあいまいにしませんか？。ウイルスや狂牛病を発症させるた  
んぱく質を、君はどちらに分類しますか？。

園丁 また僕をからかうのですか。生物学者に訊いてください。いずれにせよ、DNAも  
RNAもたんぱく質とデジタルに区別できますから、遺伝物質を内蔵しているかどう  
かは区別できるでしょう。

莊周 生物が外界と関係を結ぶことを認めるとどうなるのですか？。

園丁 摂食とは、それがどんなに精度の悪いやり方にもせよ、食べられるものと食べられ  
ないものを区別することです。つまり、外界の物質を、一様なものと見るのではなく、  
あるやり方で分節できるということです。それは、外界と特定の関係を結ぶ手段をもつ  
ているということでもあります。ですから、すでに単細胞生物の段階で生物は、外界を  
一定のやり方で分節して理解する能力をもっているのです。この能動的な働きを原初的

な認識と呼べないでしょうか？。

莊周 ああ、カントのコペルニクスの転回以前の人たちは、たいてい、外界からの刺激を受動的に受けとると考えていたのですが、君は、カントに倣って能動的という言葉を使いましたね。それは、認識という働きにふさわしいでしょう。それにしても君は、人間の認識を単細胞生物の類似の働きと同列に置くのですか？。

園丁 ええ。だって、単細胞生物も人間と同類の生物ですから。僕は、単細胞生物の出現がすでにゼロではない認識への跳躍であった、言い換えると、生きるという能動的な営みが認識をもたらす、と考えようとしているのです。

園丁 真核単細胞生物のゾウリムシは、原初的な有性生殖をするそうです。ゾウリムシが命を次の世代に伝えるために有性生殖をするには、他の個体のことをよく知らなくても配偶者を見つけて、関係を結ばなければなりません。その「認識」がどんなに限定的でも、ともかく、他者に対する原初的な認識があると言えないでしょうか？。

こんどは、やはり真核単細胞生物である真菌を考えてみましょう。キノコはたくさん菌糸が寄り集まって「生活」します。永井さんの言い方をすれば互いに真の正体を知らないたくさんの他者と関係を結び、物質を融通しあって共同生活をします。キノコに

は、原初的にせよ、外界の物質の認識と他者の認識があると言っではいけないのでしょうか？。

さて、多細胞生物が存在しますから、いつの時点かで、多数の個体の共同生活が高度化することが起きたのです。モノと情報のやりとりをし、細胞群が互いに役割を分担して有機的な共同生活を営み、ついには、一つの命を共有することにしたのです。そこまでの過程で多数の個体が相互に必要なほど“認識”しあつて、一個の統一された生命体に到達した、と表現するのは比喩が過ぎるでしょうか？。

多細胞生物の出現は画期的な出来事で、進化は劇的に進展しました。ほかの生物や生物でないモノを認識することも、単細胞生物よりもずっと進んでいます。たとえば、蟻や蜂は、多数の個体が集合して社会を形成し、ずいぶん組織化された共同生活を営みます。人間から見るとほとんど生まれながらにそうするように見えますが、個体はなんらかの他者認識をしないとできません。さらに、脊椎動物の鳥類や哺乳類になると、親が子を育て、親子のコミュニケーションがあります。特定の他者を識別して認識することができます。子は、自分で食べ物を得ることができるまでに、受け継いだ形態を活用して生活することを学習・訓練します。哺乳類の認識はより精密になって、文化と呼べるほどの段階へ進んだと言えないでしょうか？。

莊周 君がしている話は、やっぱり、現代人の常識を超えるものではありませんよ。

園丁 はい。僕は、新奇な論を立てようとしているわけではありません。ただ、単細胞生物から哺乳類の人間までの進化は、同時に、認識能力の進化でもあった、二つの進化は不可分に進行した、(生物の多様な生き方は、物質的に身体構造の複雑化と神経系の拡張として起きたのですが、それは認識能力の増大でもあった)、と言っているのです。このように、生物の進化に「認識」という視点をもちこめば、「認識」とは何かが明瞭になるでしょう。僕は、認識とは、生物が外界とかかわって生きるこの本質的な要件である、と考えます。そうして、生物には限定的だけれども自己の外のモノの在り方・ふるまい方について認識の能力があること、また、ほかの生物を多少とも認識する能力があることも認め、これを原理として置きたいのです。そうしてはいけませんか？。

莊周 認識をそのようにとらえるのは一つの考え方でしようが…。

単細胞生物から人間までの進化をもっと詳しく考えて、人間ができる認識というものをさらに肉付けしてください。

園丁 その作業を果たす能力が僕には不足していて、ここでも、あなたの助けを求めているのです。たしかに、単細胞生物の生活から人間の認識までには越えがたいほどの差が

あるように思えます。しかし、進化論は、長大な時間をかけての数えきれないほどの跳躍の累積が人間という生き物を生んだ、と主張しています。その同じ跳躍の累積が人間のこの不可思議な認識能力をもたらしたと認めよう、と言っているのです。この飛躍をしてよいでしょうか？。

莊周 ……

園丁 哲学者とは議論のすれちがいになるのでしょうか。でも、フッサールが人間の意識のぞきこんで言うことも、ウイトゲンシュタインの果てのない問いを受けて実在しない意識のシンギュラリティーを強調する永井さんの議論も、生物としての人間を考えれば解決の糸口があると思うのです。僕の考えはカントからの逸脱でしょうか？。

莊周 うーん、カントから逸脱しているのではないでしょう……

園丁 フッサールの名を出したついでに、もう一つ質問を許してください。生物は生きるために生きている、と言うのをお認めになりますか？

莊周 ……

園丁 さすがに聡明なあなたは無言で答えましたね。それを認めれば、生物に「生きる」という「目的」があることになります。たいていの人は単細胞生物に意識があると言うと否定するでしょうが、生きる「意志」と言うのは許されないのでしょうか？。生物は目

的に応じる手段を運用でき、ある活動が達成されることには「意味」があるというのはどうでしょうか。人間の意識に限らなくても、原理的に、生きる者には目的・意志・意味が随伴すると言えないでしょうか。

庄周 フッサールの問い方は問題をむずかしくしすぎのように思います。でも、君が限定した確実な認識の範囲内で、生物の生活について目的や意味などの言葉を使うことは、許されるし、議論に秩序を与えることができるでしょう。

それにしても、つぎつぎに難題を突きつけますね。これでは問答にならないですよ。

\*

庄周 ちょっと立ち止まりました。難問を畳みかけるのは対決のときには効果があるかもしれませんが、いつまでも続けては認識を進めることができないでしょう。よろしい、君の疑問符をカッコに入れて、単細胞生物から人間までのあいだには外界とのかかわり方に大きな差があるけれども、関連を認めることのできる差異の連続としてつながっていると仮定しましょう。そうして、わたしたちのあいだで、生物一般が行なう外界とのかかわりあいを仮に認識活動と呼ぶことにして、問答を続けましょう。

先ほど君が名を挙げたレーンさんは、進化の十大発明の一つに視覚を挙げていますね。蝶のわたしは、白い紙片をゆらゆらさせられるのを見るとそれに引き寄せられる程度にしか視力がありませんが、視覚は考えれば考えるほど神秘的です。

園丁 助け舟を出していただいて、ありがとうございます。自分の視覚のことを考えてみるとほんとうに不思議なほどですね。自動的に焦点を調節して立体視までできて、色彩によって対象を微細に識別する……。視点を移動すれば、外界にあるモノの前後関係も識別できます。この点検に、聴覚やマイクロメートル単位で凹凸を識別する手の触覚などを参加させることができます。視覚や聴覚は運動に敏感です。自分の身体についての体性感覚ももっていて、自分の手が今どこにあって、つぎに空間のある場所へどのくらいの時間で移動できるかも分かります。自分の内蔵のあれこれも感知できます。すべての感覚を総合して運用すれば、人間は、認識の座がどこにあるか精確には感知できませんが、自分の身体も含めて外界のモノの在り方を認識できるのです。モノにつきものの空間と時間は、この認識に付随します。カントが言うように、認識が発動する以前に、すでに空間と時間の形式があつて、実際に認識を始めると、モノはその形式に則つて認識されるのです。ですから、生物学的に観ても、空間と時間が直観の形式としてある、というのは真実です。

カテゴリーは現象の側ではなく主観の側にあると主張する人もあるようですが、生物学的に観るとどうでしょうか。視覚は明暗を、聴覚は音の強弱を、触覚は物体の硬軟を……というふうに、感覚にすでに分量や性質などを識別する働きが備わっています。感覚器官は、関係や様態に通じる識別の初期操作も行なっているのだと思われれます。食べ物を探して採集して口に入れるという動作や、捕食者から逃げるといった行動などには、判断が伴います。それぞれの感覚器官は部分的神経系を構成して感覚をカテゴリーに従って整理し、関係する感覚を知覚として総合するには上位の神経系を構成して認識を進めているはずですが、それをさらに行動にもたらすには分析的な判断ができるのではなくてはいけません。総合を行なう神経系には論理的判断を実行する神経回路が結びついていないはずなのです……。

庄周 君は、そう解釈することで、カントの言う認識の仕方を整理する四つのカテゴリーと、それに対応する判断の論理形式を、生物が具えていると言いたいのですね。

園丁 そのとおりです。進化によつて、人間は、先験的直観の形式と先験的論理学を授かったのです。この能力は、認識を始めるときすでに人間がもっています。

園丁 繰り返えしになりますが、人間の認識は、長い生物の進化の過程を経て、外界（と

身体)に對して感覺器官を發達させて知覺を高度化し、それらを総合的に把握する能力を高めてきたのです。その高度化の過程で、カントが感性と呼ぶ精神作用あるいは直観と呼ぶ理解能力が形成された、と解釈できるでしょう。その發展の先で、脳に集約される統覚がさらに感性と相對的に區別できる悟性と呼ばれる判断能力を發展させたと考えられます。ついには、統覚をどこか客觀視するような意識作用まで生じた、と考えることはできないでしょうか。人間の認識はそういう生物の認識の最も發展した段階と考へることができるとしよう。しかし、進化の概念からして、生物としての人間の認識には限界があると想定するのが大局的な観点であり、そうすることが必要だ、と僕は考へます。

今言つたことは、それぞれの感覺器官とそこからの情報の中樞神経系への連絡の仕方、脳に転写されたそれらの知覺を総合して直観的に把握する作用などなど、神経系をもつと具體的に検討して整理すべきことでしょう。脳には直観をさまざまな観点から検討する能力があることや、さまざまな論理を構成して比較・検討できること、そして、最も合理的あるいは実現可能と思われることを選び出すことができるなどなど、あれやこれや科學的研究を進めれば、感性と悟性についてカントが考へたことを、生物學的な基礎とある程度關連づけて理解できるのだと考えます。つまり、人間理性の特徴を生物

学的・物質的な働きと結びつけていくらか明確にできるだろう、と考えます。

生物としての人間は、知覚から行動まで一連のことを実行して、自然法則に違反せず自然において可能なことなら、多くの場合に目的を達成することができます。この全体が認識である、と僕は言いたいのです。

庄周 それが、君の「生きることが認識すること」という考え方ですね。

園丁 この考察をどこまでも深めて、生物の感覚器官や神経系や運動能力は、獲得した表象とその対象とがよく一致するように進化し、人間でそれは最高度に発達している、つまり、より高度の認識ができるようになった、と考えることはできませんか？。先ほど中途半端になりましたが、直観の形式が人間の認識に具わっているのは、自然の側にある空間と時間の形式が、感覚系を進化させる途上で身についたからだと考えることができませんか？。同様に、人間の主観に具わっている論理形式は、自然を対象にして生きるのに、自然物の在り方に対応できるように脳神経系を形成したからだと考えることができますせんか？。つまり、自然の現象の側に人間の論理形式に対応するものがある、と考えることはできませんか？。その対応が確実でなければ、自然界で生きていくことに不具合が生じるでしょう。

自分のことを反省すると、錯誤や失敗を犯します。しかし、生物はそれを実践的に克服して、よりよい認識に至るのです。たとえば、人間の直観は、空間を三次元にとらえます。しかし、もし超弦理論が正しければ、空間は九次元かもしれません。人間の生活は空間が三次元だとしてやっていけるので、生物として利用できる物質的手段からも、三次元空間としか認識できないのかもしれませんが。あるいは、人間は今では、微視的世界の物質が量子力学的なふるまいをすることを知っています。ですが、微視的世界ではモノが粒子的かつ波動的にふるまうと言われても、いまひとつしっくりと理解できません。それは、ひよつとすると、認識の論理形式が自然に対して最適でないからかもしれません。しかし、これらの奇妙な現象を実際に理解できるのですから、人間は、十分な認識能力をもつ、ということができるとでしょう。これからも、僕たちのもっている認識能力を信頼して認識を進めることができる、と考えてよいのではないのでしょうか？。

人間は生きていくのに基本的に成功していますから、人間はこの世界でとても成功する認識を遂行できる、人間の獲得する表象はその対象とほとんど「必然的に」結びついている、こうまとめてはいけなんでしょうか？。

莊周 また、疑問符だらけですね。まあ相当に成功しているぐらいにとどめるなら、わたしも賛同します。

園丁 僕は、すでに「蝶の雑記帳五十三」で生命を科学的に理解するレーンさんの立場に同意して、人間の意識についての生物科学的な見方を肯定し、その意味で唯物論的な立場を表明しました。ところが、哲学的な議論の場に移ると、僕たちは進化論に依拠することまでの議論を断定することができません。しかしカントも、人間の獲得した表象とその対象とが合致することを原理として要請するほかはありませんでした。ここまでの僕たちの不十分な議論でも、進化論に最大の蓋然性があるとしなければその原理に近づけないということでしょうか？。

荘周 うーん。二十世紀の自然科学の進展とくに生物学の偉大な達成にもかかわらず、人間の認識の原理をこの程度しか説明できないのですか。君とわたしの力不足に問題がありませんか？。わたしたちは、生物の進化をさつとなぞって人間に飛び移り、神経系統の担う認識作用をわずかに推測しておぼろげな見通しをつけようとしたただけだ、ということをおわきまえておくべきです。

しかしこの段階で、わたしは、人間の認識には生物学から観ても限界があるということに同意しましょう。君の最後の論点については、わたしもほとんどそれに賛同しますが、論理上、進化論は人間の得る表象と対象の必然的な合致を保証するものではない、ということですね。

園丁 そうですね。すると、ほかの人は知りませんが、僕たちは、肉付けはできそうだと  
いう感触を得たものの、いまだにカントの認識論の枠内にとどまっているわけです。  
莊周 じつのところ、君はそういう立場を選んできたのです。

園丁 それにしても、前回考えたニーチェは、人間の認識についての僕の理解なんか突き  
破って進もうとしたのでしょね。平凡な僕は、あの激しい反応を真似ることはできま  
せん。不死の観念を永遠回帰の観念で置き換えて雄々しく闘うやり方に従うことはでき  
ません。科学的認識を評価する僕は、二十世紀の自然科学の発展を無駄にして、ニーチ  
ェと同じようにすべてに反抗しているだけではない、と考えます。彼の時代から百  
五十年の年月は、人間の置かれた境遇を、変えることはできなかったけれど、もう少し  
冷静に受けとめる態度を養ってくれたと思いますのです。

莊周 君の今日の議論は、多くの自然科学者が考えている域を出ないでしょう。優れた自  
然科学者の思想にも反対する哲学者がいれば、わたしは君を守りきれません。それでも、  
わたしは君の側に立ちますよ。君は、先ほどつけたカッコをはずして、疑問を保持した  
まま考え続けてください。ともかく、わたしたちは、わたしたちの認識が確実かどうか  
いつも考える態度を保持して、用心しながら進みましよう。

21 園丁と蝶の対話 「認識と言語を巡って」その六

二〇一七年、七月